

■駿河漆器 変わり塗り

○明治・大正期 静岡工業試験場で開発された主な変わり塗り

染箔塗（せんぱくぬり） 特許 16497 号 明治 42 年（1909）6 月

染箔塗は、中塗砥ぎの上に箔下漆にて銀箔置きをし、よく乾燥した後、柿渋を一回兎毛刷毛で引き、これが乾燥した後、塩基性染料ローダミンをアルコールに溶かして、これを適当に水で薄めてその上より引くこと二回にして水洗いし、乾いた後透漆を薄めに二回塗り、乾燥後研磨仕上げとする。

羽衣塗（はごろもぬり） 特許 20829 号 明治 44 年（1911）10 月

羽衣塗は、木目転写塗である。この塗法はまず現板とする如意輪木目の板を選定し、この厚板に濃硫酸を流し、約二時間ほど板面を焼き、後よく水洗い乾燥したあと木地呂漆六匁目、生漆四匁目に少量の紅柄を加えてよく練り合わせた漆を「ルーラー」にて板面に薄くもった上にロール紙をあてて木目を転写し、さらにそれを器物に転写する。ただしこの場合の器物は赤中塗研面にして、アルミ粉蒔きによって原板と同一の木目を現出する。粉蒔き後透漆を塗り込み研磨仕上げとする。

硬化彩漆法（こうかさいしつほう） 特許 27805 号 明治 44 年（1911）10 月

硬化彩漆に使用する染料は、漆に混合した場合には不乾燥として使用されなかったが、本発明は塩基性染料、青「ナイルブリウ」ニ匁目五分位に牛乳カゼイン五匁目を糊状にし、これを梨子地漆百匁目とよく練り合わせて、箔置きの上に絵模様を描き、乾燥後絵模様以外の箔は炭粉で摺り取って、任意の漆を塗り研磨仕上げとする。

浮島塗（うきしまぬり） 特許 23129 号 大正元年（1912）12 月

浮島塗は、中塗砥ぎ後に、箔下漆にて銀箔置きをし、よく乾燥した後模様づけをする。この模様付けに用いる容器は、トタンのタンクにして、その大きさは四尺角、深さ三尺位を適当とする。これに水を八分目ほど満たして、その水面に墨汁を流す。酢酸を含ませて墨汁を溶かし、この液を容器の四隅から絞り出すように流す。液が水面に一杯に広がった時、篋（へら）先で思いのままの流れ模様を構成し、これを器物の面に転写し、水洗乾燥の後透漆を塗って研磨仕上げとする。

紅輝塗（こうきぬり） 特許 30630 号 大正 6 年（1917）6 月

紅輝塗は、硬化彩漆の漆を高級テレピン油にてうすめ、篋（へら）にて赤・青の彩漆を同時に糸を引くようにタンクの水面に落とし、その彩漆が水面に広がった時、静かに篋先にて彩漆が入り乱れるように木目または水紋式模様を構成し、これを銀箔着せをした器物面にこの模様を水中にて転写して、水洗乾燥後透漆を塗り研磨仕上げとする。

蜻蛉塗（せいれいぬり） 特許 29581 号 大正 5 年（1916） 6 月

蜻蛉塗は最も高雅な塗法にして、また最も技術的な仕方である。まず品質の優良な呂色漆をアルコールにて適度に溶かし、この漆液を水面の中央に点下すると、水面いっぱいに細い線の網を構成する。この時呂色の中研ぎ面にこの模様を転写し、水分の乾燥を待って金、銀の丸粉を蒔きつけ、呂色漆または色漆を塗って研磨仕上げとする。



🗳️ 蜻蛉塗の硯箱

変わり塗りは紹介したように、多種多様であり、自然にその応用の範囲も、普通の漆器はもとより、一般の家具、室内調度品から建造物にいたるまで応用されています。特に静岡は変わり塗りの大産地として古くからその特長を認められていました。上記以外にも静岡には、次のような変わり塗りがあります。

○錫梨子地塗（すずなしじぬり）

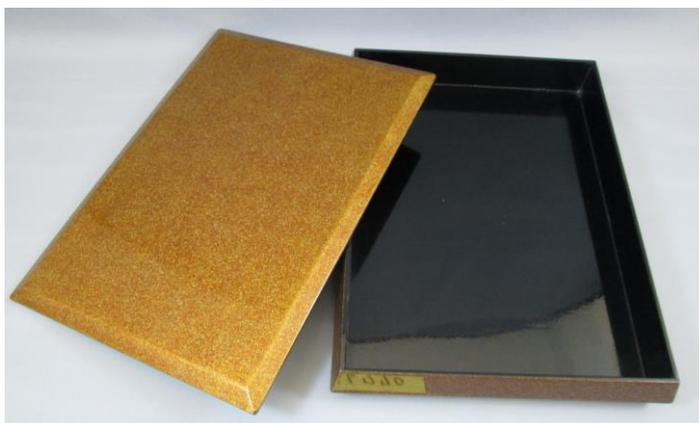
錫梨子地は、一名「五味坂梨子地」とも呼ばれ、錫粉をもって金色を巧みに出すのが特徴で、その色合いは本金のものより美麗です。

五味坂某は、明治維新の前後、人宿町に居住し、静岡における錫梨子地の始祖といわれ、その子にあたる中川長吉も梨子地塗の名手でありました。当時は伝家の秘法とされ、梨子地研ぎのできるものは同家以外にはなかったとのことでした。

中川長吉は、三番町に住み、徒弟20人くらいを養成した静岡漆器界の功労者です。

長吉について指導を受けた人たちに、櫻井直吉、佐々木喜作、望月作、榊原正、山本清成、加山安兵衛などがいました。その後、福地徳蔵が技を継承し、八木秀雄もこの塗法を修得していたようです。

ここに中川長吉の年賀状と自宅建物の写真がありますので紹介します。



錫梨子地塗の文箱

○金剛石目塗（こんごういしめぬり） 大正13年（1924）

金剛石目塗は、鳥羽清一の漆器製作に砂を使う画期的な発案にはじまります。以後、試行錯誤の末、大正13年（1924）独自の「砂の蒔地」（下地法）を完成させました。

この技法の特長は、素地（木製品など）に漆と良質の砂を使って、たいへん堅牢な下地層を作ることにあります。「砂の蒔地」は全国的にも歴史的にも金剛石目塗だけのものです。

金剛石目塗では砂の蒔地による下地層の上に、漆を重ね塗り、ひとつひとつ丁寧に仕上げているので、こうして完成した漆器は、美しい深みのある艶を持ち、そのうえ熱や水にも強く実用的に優れたものです。

塗漆の下地法には大きく分けて3種類あります。

本堅地	粉末（砥粉、地の粉など）を水と練り合わせて粘土のような状態にしたものに、生漆を加え混ぜ合わせたものを素地に塗る
本地	粉末を生漆と混ぜて素地に塗る
蒔地	漆を薄く塗って乾かないうちに下地用の粉末を蒔きつけて乾かす

三種類の下地法は二千年前から中国に存在した技法で、水をいっさい加えない本地と蒔地がより堅牢なものとされています。しかし、本地・蒔地はあまりにも堅過ぎてその作業効率が悪く、凸凹のないきれいな下地層を作るには、たいへんな技術的修練が必要であることから、江戸時代末期くらいからほとんど行われなくなってしまった技法です。

金剛石目塗の下地は蒔地の一種です。素地に安倍川で採れる良質な砂を使っています。

鳥羽漆芸ホームページより

金剛石目塗は、大正13年に静岡県の無形文化財に指定されています。



📌 金剛石目塗のお椀